



日露交渉、關及彼復

下號

全五冊

早稲田大学図書館
文書27
B 84
4



明治三十七年三月二十三日

日露交渉事件



高島

外務大臣送付日露交渉ニ關スル往復別冊一部及御回付候也

明治三十七年三月二十三日

内閣總理大臣 伯爵桂 太郎

貴族院議長 公爵徳川 家達殿

日露交渉事件



自明治三十六年七月至
明治三十七年二月

宮島誠郎所藏

日露交渉ニ關スル往復別冊一部茲ニ及御送付候也

明治三十七年三月二十三日

外務大臣 男爵小村壽太郎

貴族院議長 公爵徳川家達殿

明治三十七年三月二十三日
外務大臣 男爵小村壽太郎
貴族院議長 公爵徳川家達殿

日露交渉ニ關スル往復

自明治三十六年七月
至明治三十七年二月

貴州河橋長久保源田奉勅

明治三十三年三月二十三日

長久保源田奉勅

日露交渉ニ關スル往復

日露交渉ニ關スル往復目次

番號	年	月	日	自誰	至誰	大	意	頁數
一	明治卅六年	七月	廿八日	發	外務大臣	在露公使	滿韓兩地ニ關シ日露間ニ協商ヲ遂クル爲メ商議ヲ開クコトニ付露國政府ノ意向ヲ確ムヘキ旨訓令	一
二	同	七月	卅一日	發	在露公使	外務大臣	露國外務大臣ハ一己ノ意見トシテ右ニ異議ナキモ同國皇帝ノ允可ヲ得確答スヘキ旨回答セリトノ件回報	三
三	同	八月	三日	發	外務大臣	在露公使	帝國政府ヨリ提出スヘキ協商案内示	四
四	同	八月	五日	發	在露公使	外務大臣	「ラムスドルフ」伯談判開始ノ允可ヲ得タル旨稟報	六
五	同	八月	六日	發	外務大臣	在露公使	露國政府ニ對シ協商案提出方訓令	七
六	同	八月	十二日	發	在露公使	外務大臣	「ラムスドルフ」伯ヘ右協商案ヲ手交シタル旨稟報	七
七	同	八月	廿四日	發	同	上	「ラムスドルフ」伯ヨリ本件商議ヲ東京ニ移スヘシトノ發議アリタル旨報告	八
八	同	八月	廿六日	發	外務大臣	在露公使	商議地變更ノ議ニ反對スヘキ旨訓令	九
九	同	八月	廿七日	發	在露公使	外務大臣	露國外務大臣ニ於テハ其ノ主張ヲ固持スル旨回報	九
十	同	八月	廿九日	發	外務大臣	在露公使	重ネテ商議地變更ニ反對シ并ニ日本ノ提案ヲ以テ商議ノ基礎ト爲サシムルコトニ付訓令	一〇

番號	年	月	日	自誰	至誰	大	意	頁數
十一	明治卅六年	八月	卅一日	在露公使	外務大臣	右ニ對スル露國外務大臣ノ異議報告		一一
十二		九月	二日	外務大臣	在露公使	露京ニ於テ商議ヲ繼續シ并ニ日本提案ヲ以テ商議ノ基礎ト爲サシムルコトニ付再應ノ訓令		一三
十三		九月	五日	在露公使	外務大臣	露國外務大臣ハ日本ノ提案ト露國ノ對案トヲ以テ基礎トシ又商議ハ東京ニ於テ之ヲ行フコトヲ主張スル旨回報		一四
十四		九月	七日	外務大臣	在露公使	右ニ對シテ同意ヲ表シ併セテ速ニ露國對案ノ提出ヲ求ムヘキ旨訓令		一六
十五		九月	九日	在露公使	外務大臣	「ローゼン」公使及極東總督ハ既ニ必要ノ訓令ヲ受ケタリトノ件回報		一六
十六		九月	廿四日	外務大臣	在露公使	「ローゼン」公使「アレキシエフ」大將ト協議ノ爲メ旅順ヘ出發ノ件通報		一七
十七		十月	五日	同上	同上	「ローゼン」公使旅順ヨリ歸來ノ上提出シタル露國對案內示		一七
十八		十月	八日	同上	同上	「ローゼン」公使ト會商ヲ開始シタル旨通報		一九
十九		十月	十六日	同上	同上	露國對案ニ對シ提出シタル修正條項內示		一九
二十		十月	廿二日	同上	同上	「ローゼン」公使ト會商ノ經過內示		二一
二十一		十月	廿九日	同上	同上	同上		二二

二十二	同	十月	三十日	同上	同上	露國對案ニ對シ提出シタル日本ノ確定修正案內示		二二
二十三	同	十一月	一日	同上	同上	右確定修正案ハ「ローゼン」公使帶有ノ訓令範圍外ニ屬スル趣ヲ以テ同公使ヨリ本國政府ノ訓令ヲ求メタルニ付露國外務大臣ニ面會ノ上帝國政府ノ主張ヲ説明スヘキ旨訓令		二四
二十四	同	十一月	三日	在露公使	外務大臣	右訓令ニ依リ露國外務大臣代理ト會談ノ要領具報		二五
二十五	同	十一月	十三日	同上	同上	確定修正案ニ關シ「ラムスドルフ」伯ト會談ノ要領具報		二六
二十六	同	十一月	廿一日	外務大臣	在露公使	速ニ談判ヲ繼續スル様「ローゼン」公使ヘ發訓ヲ求ムヘキ旨訓令		二八
二十七	同	十一月	廿二日	在露公使	外務大臣	右訓令ニ基キ「ラムスドルフ」伯ト會談ノ結果報告		二九
二十八	同	十一月	廿八日	外務大臣	在露公使	「ローゼン」公使ヘ發訓ノ手續ヲ執ラレシヤ否「ラムスドルフ」伯ニ問合方訓令		三一
二十九	同	十一月	廿七日	在露公使	外務大臣	皇后御不豫ノ爲メ「ラムスドルフ」伯皇帝ニ拜謁ヲ延引シタル件申報		三一
三十	同	十二月	一日	外務大臣	在露公使	交渉問題速決ノ緊要ヲ露國政府ニ説示スヘキ旨訓令		三二
三十一	同	十二月	二日	在露公使	外務大臣	露國政府ハ尙「アレキシエフ」總督ト通信ヲ重ネツツアル旨申報		三二
三十二	同	十二月	四日	同上	同上	交渉問題速決ノ必要ヲ皇帝ニ具奏シ其ノ結果通報スヘキ旨「ラムスドルフ」伯ヨリ答話ノ件		三三
三十三	同	十二月	九日	同上	同上	「アレキシエフ」總督ヨリ提出ニ係ル露國修正案ヲ基礎トシ談判ヲ繼續スヘキ旨ノ勅命既ニ同總督并ニ「ローゼン」公使ニ發送セラレタル旨「ラムスドルフ」伯ヨリ談話ノ件		三三

番號	年	月	日	自誰	至誰	大意	頁數
三十四	明治卅六年	十二月	十二日	外務大臣	在露公使	前訛露國修正對案「ローゼン」公使ヨリ提出ニ付通報	三四
三十五	同	十二月	廿一日	同上	同上	右ニ付協商ノ範圍ニ關シ露國政府ノ再考ヲ求メ并ニ帝國政府カ必要ト認ムル修正條約「ラムズドルフ」伯ニ提示ノ爲メ口上書提出方訓令	三五
三十六	同	十二月	廿三日	在露公使	外務大臣	右口上書提出ノ件回報	三七
三十七	明治卅七年	一月	一日	在露公使	外務大臣	「ラムズドルフ」伯ニ會見右口上書ニ關スル露國政府ノ處置問合ノ結果申報	三八
三十八	同	一月	七日	外務大臣	在露公使	「ローゼン」公使ヨリ新ニ提出シタル露國政府ノ復答内示	三八
三十九	同	一月	十三日	同上	同上	露國ノ復答ニ關シ外務大臣ヨリ露國公使ヘ開陳ノ次第ヲ確ムル爲メ「ラムズドルフ」伯ヘ口上書手交方訓令	三九
四十	同	一月	廿三日	同上	同上	右口上書ニ對スル露國政府ノ回答ニ付「ラムズドルフ」伯ニ問合方訓令	四一
四十一	同	一月	廿五日	在露公使	外務大臣	右訓令ニヨリ「ラムズドルフ」伯ト會見ノ結果具報	四二
四十二	同	一月	廿六日	外務大臣	在露公使	「ラムズドルフ」伯ニ會見露國政府ノ回答ヲ促スヘキ旨訓令	四二
四十三	同	一月	廿七日	在露公使	外務大臣	右ニ付「ラムズドルフ」伯ノ返答并ニ帝國カ韓國ヘ多數ノ軍隊軍器等ヲ送リタルトノ說ニ付同伯ヨリ質問アリタル件申報	四三
四十四	同	一月	廿八日	外務大臣	在露公使	韓國ニ軍隊軍器送遣ノ報ヲ否認シタル上韓國國境ニ於ケル露軍集中ノ報ニ付實否ヲ質シ尙ホ露國回答ノ性質及日取ヲ尋ヌヘキ旨訓令	四四

四十五	同	一月	廿八日	在露公使	外務大臣	右ニ付「ラムズドルフ」伯ト會見ノ結果申報	四五
四十六	同	一月	三十日	外務大臣	在露公使	露國回答ノ確タル日取ヲ問合スヘキ旨再應ノ訓令	四六
四十七	同	二月	一日	在露公使	外務大臣	右日取ハ確言スル能ハサル旨「ラムズドルフ」伯ノ返答具報	四六
四十八	同	二月	五日	外務大臣	在露公使	日露協商ニ關スル談判ヲ斷絶シ同時ニ帝國政府ハ自衛ノ爲メ并ニ帝國ノ權利及利益ヲ擁護スル爲メ最良ト思惟スル獨立ノ行動ヲ採ルコトノ權利ヲ保留スル旨露國政府ヘ通牒方訓令	四七
四十九	同	二月	五日	外務大臣	在露公使	露國政府トノ外交關係ヲ斷絶シ館員ヲ率ヒテ露京ヲ撤退スル旨露國政府ヘ通牒方訓令	四九
五十	同	二月	五日	在露公使	外務大臣	露國回答ノ要旨ハ既ニ「アレキシエフ」總督ヘ電報セラレタル旨并ニ其ノ内容ニ關スル露國外務大臣ノ談話報告	五〇
五十一	同	二月	六日	在露公使	外務大臣	日露協商談判并ニ露國トノ外交關係斷絶ノ公文提出ヲ了シタル旨申報	五一

日露交渉ニ關スル往復

○第一 (電信) 明治三十六年七月二十八日發

在露

栗野全權公使

小村外務大臣

滿洲事件ノ發展ハ帝國政府ノ專心留意シタル所ニシテ而シテ其ノ現状ハ帝國政府ヲシテ轉々關心ニ勝ヘサラシム

蓋シ露國カ滿洲撤退ノ件ニ關シテ爲シタル一面清國ニ對スル約定ト一面列國ニ對スル證言トヲ履行スルナラムトノ期望ノ存シタル限リハ帝國政府ハ偏ニ注視緘黙ノ態度ヲ恪守シ來リタリ然ルニ露國近來ノ行動タル北京ニ於テハ新ニ要求ヲ提出シ滿洲ニ於テハ愈々其ノ把握ヲ堅フシ遂ニ帝國政府ヲシテ露國ハ滿洲撤退ノ意思ヲ拋棄シタルモノト信セサルヲ得サラシムルモノアルト同時ニ其ノ韓國國境ニ於ケル倍々活潑ナル行動ハ露國ノ慾望遂ニ那邊ニ底止スルヤヲ知ラサシムトス若シ露國ヲシテ滿洲ヲ無制限ニ且永久ニ占領セシムムニハ其ノ結果帝國ノ安固ト利益トニ有害ナル状態ヲ惹起スヘシ所謂機會均等ノ主義ハ之ニ因テ破壞セラルヘク清國ノ領土保全亦之カ爲メニ毀損セラルヘキナリ然リ而シテ茲ニ我日本政府ニ取テ更ニ之ヨリ重大ナルモノアリ何ソヤ露國ニシテ韓國ノ側面ニ據駐スルトキハ同國ノ獨立ハ爲メニ絶ヘス侵迫ヲ被ルヘク或ハ少ナクトモ露國

ヲシテ韓半島ニ於ケル優勢國タラシムヘキコト即チ是ナリ抑モ韓國ハ我防護線ニ於ケル緊要ナル前哨タリ隨テ其ノ獨立ハ帝國ノ康寧ト安全トノ爲メ絶對的ニ必要トナス所タリ將タ帝國カ韓國ニ於テ有スル政治上并ニ商工業上ノ利益ト其勢力トハ實ニ他國ニ卓絶スル所ニシテ而モ斯ル利益ト勢力トハ帝國カ自己ノ安固ニ鑑ミ之ヲ他國ニ交付シ又ハ之ヲ他國ト分有スルカ如キハ決シテ肯諾スル能ハサル所ノモノタリ

帝國政府ハ是ニ於テ深思熟慮ノ後目下正シク我憂慮ノ因タル問題ヲ解決スヘキ一ノ協商ヲ露國ト締結スルヲ期シ和衷坦懷以テ露國政府ニ謀ルニ決シタリ而シテ帝國政府ノ見ヲ以テスレハ今ヤ斯ル協定ヲ試ミルニ於テ恰好ノ時機ニシテ若シ之ヲ逸セハ再ヒ協商ノ餘地ナキニ至ルヘシト信ス故ニ帝國政府ハ貴官ノ判識ト裁量トニ信賴シ此機微ナル折衝ヲ貴官ニ委ヌルニ決セリ帝國政府ハ露國政府ニ對シ本件ノ申込ヲ爲スニ於テ全然公然ノ形式ニ由ラムト欲スルヲ以テ貴官ハ露國外務大臣「ラムスドルフ」伯閣下ニ向ヒ左ノ趣旨ノ口上書ヲ提出シテ本件ノ端ヲ啓カルヘシ

日本政府ハ日露兩國ノ關係上凡ソ將來誤解ノ原由タルヘキモノヲ一掃セムコトヲ希望シ露國政府モ亦之ト同感ナルヘシト信ス是ヲ以テ茲ニ極東ニ於ケル兩國各自ノ特殊利益ヲ劃定スルヲ期シ露國政府ト共ニ兩者利益ノ觸接スル方面ニ於ケル事態ヲ查覈スルハ日本政府ノ喜フ所ナリ

若シ此發案ニシテ幸ニ大體ニ於テ露國政府ノ贊同ヲ得ハ日本政府ハ右協商ノ性質及範圍ニ關シ其ノ意見ヲ露國政府ニ提出スル所アラムトス右口上書ヲ提出スルニ當リ貴官ハ露國外務大臣ヲシテ我目的ノ全然友好的ナルコト但シ本件ハ我ニ於テ大ニ重要視スル所タルコトヲ解得セシムルニ努メラルヘシ尙貴官ハ右口上書ヲ成ルヘク早ク「ラムスドルフ」伯ニ提出セラルヘク又本電訓ニ遵テ執ラレタル措置ハ一一詳報セラルヘシ而シテ露國政府ヨリ應諾ノ回答ニ接シタル上ハ我提議ノ要領ハ直チニ之ヲ貴官ニ電報スヘシ

○第二 (電信) 露京發明治三十六年七月三十一日 東京着同 八月二日

小村外務大臣

栗野全權公使

本官ハ七月三十一日「ラムスドルフ」伯ト會見セリ口上書ヲ同伯ニ手交スルニ當リ本官ハ大要左ノ通り陳述シタリ

極東ニ於ケル事態ハ倍々糾紛ヲ加ヘツツアリ今ニ於テ日露間ニ於ケル總テノ誤解ヲ除去セムカ爲メ何等カ措施スル所アラスムハ兩國ノ關係ハ愈々困難トナルヘク而シテ斯ノ如キハ徒ラニ兩國ニ不利ヲ與フルニ過キス故ニ日本政府ニ於テハ深ク坦懷和衷ノ精神ニ勵マサレ茲ニ露國政府

ト相謀リテ一ノ協定ヲ遂ケムト決シ本使ニ訓令シテ此口上書ヲ閣下ニ手交セシム
 本官ハ「ラムスドルフ」伯カ口上書ヲ讀過セラルルヲ待チ露國政府ニ於テモ亦同様ノ精神ヲ以テ帝
 國政府ト其ノ所見ヲ同フセラレムコトヲ望ム旨ヲ言明シタルニ伯ハ曰ク自分カ從來貴公使ニ對シ
 屢次申述ヘタル如ク日露兩國間ノ協商ハ啻ニ願ハシキ義タルノミナラス又實ニ最良ノ政策ニシテ
 且兩國ニシテ一タヒ完全ノ協商ヲ遂ケムカ將來兩國ニ對シ離間ノ策ヲ試ミルモ亦之ナカルヘシ
 左レハ貴政府今回ノ決定ハ自分一己トシテハ全然満足スル所ナルカ何分ノ確答ヲ爲スニ先チ我皇
 帝陛下ニ謁見セムコトヲ欲スト而シテ伯ハ來火曜日(八月四日)ニ謁見ノ積ニ付其ノ翌水曜日(五
 日)ニ回答ヲ爲スヘシト約セラレタリ尙ホ伯ハ皇帝陛下モ亦慥カニ本件ニ贊成アラセラルヘシト
 附言セリ

○第三 (電信) 明治三十六年八月三日發

栗野全權公使

小村外務大臣

七月二十八日當方發電信ニ關シ帝國政府ハ日露兩國ノ利益相接觸スル部面ニ於ケル事態ニ就キ審
 慮ノ後左ノ諸項ヲ兩國協商ノ基礎トシテ提出スルニ決シタリ

第一條 清韓兩帝國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコト并ニ該兩國ニ於ケル各國ノ商工業ノ爲メ機

會均等ノ主義ヲ保持スヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優勢ナル利益ヲ承認シ日本ハ滿洲ニ於ケル鐵道經營ニ就キ露
 國ノ特殊ナル利益ヲ承認シ併セテ本協約第一條規定ノ下ニ右劃定セラレタル兩國各自ノ利益ヲ
 保護スルカ爲メ必要ナル措置ヲ日本ハ韓國ニ於テ露國ハ滿洲ニ於テ執ルノ權利ヲ相互ニ承認ス
 ルコト

第三條 日露兩國ハ本協約第一條ノ條項ト背馳セサル限り韓國ニ於ケル日本及滿洲ニ於ケル露國
 ノ商業的及工業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

又今後韓國鐵道ヲ滿洲南部ニ延長シ以テ東清鐵道及山海關牛莊線ニ接續セシムトスルコトア
 ルモ之ヲ阻礙セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 本協約第二條ニ掲ケタル利益ヲ保護スルノ目的又ハ國際紛爭ヲ起スヘキ叛亂若ハ騷擾ヲ
 鎮定スルノ目的ヲ以テ日本ヨリ韓國ニ或ハ露國ヨリ滿洲ニ軍隊派遣ノ必要ヲ見ルニ於テハ其ノ
 派遣ノ軍隊ハ如何ナル場合ニ於テモ實際必要ナル員數ヲ超ユヘカラサルコト且右軍隊ハ其ノ任
 務ヲ果シ次第直チニ召還スヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第五條 韓國ニ於ケル改革及善政ノ爲メ助言及援助(但シ必要ナル軍事上ノ援助ヲ包含スルコト)
 ヲ與フルハ日本ノ專權ニ屬スルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第六條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト
前記案文ヲ「ラムスドルフ」伯ニ手交セラルルノ際貴官ハ本案ハ日露兩國間ニ設クヘキ満足ナル協
定ノ基礎ト爲スニ足ルモノト見做サルヘシトノ確信ヲ以テ提出スルモノナリト述ヘラレ次テ本案
ニ對シ「ラムスドルフ」伯ヨリ提出セラルヘキ修正又ハ意見ハ帝國政府ニ於テ直チニ之ニ友好的考
量ヲ加フヘキ旨ヲ同伯ニ確保セラルヘシ

本案各條項ハ多クハ自明ニ屬スルヲ以テ貴官ニ於テ多言ノ説明ヲ與ヘラルルノ要ナカルヘシ但シ
本案ハ大體ニ於テ兩國政府カ業已ニ承認シタル主義又ハ從前ノ協定中ニ記入セラレタル條件ヲ推
理敷衍シタルモノニ外ナラサルコトハ之ヲ指摘セラルルモ可ナリ

上述ノ訓令ハ曩ニ貴官ヨリ提出サレタル口上書ニ對スル露國ノ回答ヲ諾應的ノモノト豫想シテ之
ヲ貴官ニ送ルモノナレトモ貴官ハ先ツ以テ右露國ノ回答ヲ本大臣ニ電報セラレ之ニ對シ更ニ本大
臣ヨリ何分ノ訓令アルヲ俟テ後ニ之ヲ遵行セラルヘシ

○第四 (電信) 露京發明治三十六年八月五日
東京着同 同 六日

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ口上書ノ件ニ就キ本官ト談判ヲ開始スルノ允可ヲ皇帝陛下ヨリ得タリト述ヘ
ラレタリ

○第五 (電信) 明治三十六年八月六日發

栗野全權公使

小村外務大臣

八月一日發并ニ同五日發貴電ニ關シ貴官ハ「ラムスドルフ」伯ニ對シ帝國政府ハ日露兩國間協商ノ
件ニ關シ商議ヲ開始セムカタメニ爲シタル其ノ提議ニ對シ露國政府カ友好ノ精神ヲ以テ之ヲ接受
セラレタルヲ深ク感諒スル旨ヲ述ヘ本月一日當方發電信ノ訓令ニ遵據シテ速ニ我案ヲ露國政府ニ
提出セラルヘシ

○第六 (電信) 露京發明治三十六年八月十二日
東京着同 同 十四日

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ目下甚タ多忙ニシテ漸ク今十二日ニ至リ本官ヲ接見スルヲ得タリ本官ハ我提
案ヲ英文ニ認メテ之ヲ伯ニ手交シテ御訓令ノ旨趣ヲ言明シ次テ極東ニ於ケル事態ハ現下益々紛糾
ヲ加ヘツツアルカ故ニ締約一日ヲ遲フセハ一段ノ困難ヲ増スヘシ就テハ出來得ル限り本件ノ解決
ヲ取急カレムコトヲ望ム旨附言シタルニ伯ハ細心以テ我提案ヲ閲查スヘシト答ヘラレタリ

○第七 (電信) 露京發明治三十六年八月二十四日
東京着同 同 二十五日

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ昨二十三日特別ノ打合セヲ以テ本官ヲ接見セリ本官ハ帝國政府ニ於テハ目下切ニ露國ノ答ヲ翹待シツツアル旨ヲ述ヘ我提案ニ關スル同伯ノ意向及露國政府ノ態度ヲ尋問シタルニ伯ハ該提案ヲ篤ト研究シタルモ皇帝陛下ハ演習ノ爲メ一週間餘御不在ナルニヨリ之ニ關シ何等ノ措置ヲ採ル能ハサリシト述ヘ且「アレキシエフ」大將ニ移牒スヘキ細目ノ點亦尠ナカラサルヘキヲ以テ本件商議ヲ東京ニ移スコトニ就キ本官ノ意見ヲ問ハレタリ依テ本官ハ之ニ對シ日本政府ハ既ニ商議ヲ本官ニ委任セルカ故ニ本官ハ之ヲ當地ニ於テ行ハムコトヲ欲ス尤モ伯ノ意見ハ閣下ニ通報スルヲ辭セスト答ヘタリ
伯ハ「アレキシエフ」大將ノ意見ヲ徵セム爲メ已ニ我提案ノ寫ヲ旅順ニ發送シタリト附言セラレタリ
右談話ノ後伯ハ滿洲ニ於ケル我鐵道經營ノ件ハ之ヲ承諾スルコト困難ナルヘキモ他ノ諸點ニ關シテハ或ハ露政府ニ於テ妥協ニ至ルヲ得ルナラムト説ケリ之ニ對シ本官ハ満足ナル協商ヲ遂ケムカ爲メニハ宜ク交讓ト和協ノ精神ナカルヘカラス若シ「ラムスドルフ」伯ヨリ何等提言セラルル所アラムニハ帝國政府ハ素ヨリ之ニ好意的考量ヲ與フヘシト答ヘタリ

○第八 (電信) 明治三十六年八月二十六日發

栗野全權公使

小村外務大臣

八月二十四日發貴電ニ關シ帝國政府ハ露京ニ於テ商議ヲ行ハムコト、事ノ進行上頗ル便易ナル可シト信スルヲ以テ右ハ同地ニ於テ繼續セムコトヲ欲スル旨貴官ヨリ「ラムスドルフ」伯ニ告ケラルヘシ貴官ハ同時ニ本件商議ニ關シテハ別ニ地方的知識ヲ要スルカ如キ細目事項之ナキコト并ニ帝國政府ハ業已ニ本件商議ヲ貴官ニ委任シタルカ故ニ今更之ヲ變更スルハ其ノ好マサル所ナル旨ヲ附言セラルヘシ
帝國政府ハ其ノ提案ニ對スル露國政府ノ確答ヲ切ニ翹望ス貴官ハ此事ヲ露國外務大臣ニ告ケ尙右確答ヲ出來得ル限り速ニ得ルコトニ引續キ御盡力アラムコトヲ希望ス

○第九 (電信) 露京發明治三十六年八月二十七日
東京着同 同 二十八日

小村外務大臣

栗野全權公使

八月二十六日發御電訓ノ件ニ關シ本官ハ今二十七日「ラムスドルフ」伯ニ會見セリ伯ハ去ル火曜日

商議
東京移ス

(二十五日)皇帝ニ謁見シタル時陛下ハ速ニ日露兩國間ニ満足ナル協商ノ締結ヲ見ムコトヲ望マセ
ラレ本件ノ進行ヲ速ムカ爲メ東京ニ於テ商議ヲ行ハシメムト欲セララル旨仰セラレタリト曰ヒ
次テ又露國皇帝ハ來ル月曜日(八月三十一日)ヲ以テ當府御發輦、地方ニ行幸遊ハサレ引續キ或ル
期間、外國ニ御旅行遊ハサルヘキ筈ニテ其ノ間ハ關係諸大臣ハ露都ニ不在ナルヘキカ故ニ東京ニ
於テ商議ヲ行フハ本件完結ノ爲メ便宜且捷徑タルヘシト謂ハレタリ本官ハ去二十三日同伯トノ會
談ヲ援キ抑モ今回協商ノ目的ハ主トシテ主義政綱ニ關シ細目ニ互ラサルカ故ニ其ノ商議ハ之ヲ露
都ニ於テセムコト適當ニシテ而モ満足ニ成効スルノ最捷徑タルヘキ旨ヲ述ヘタルモ伯ハ前言ヲ繰
返シ其ノ主張ヲ固持セリ

此ノ如キ事情ナルカ故ニ「ラムスドルフ」伯ヲシテ斯ク皇帝陛下ノ允准ヲ經テ提言セラレタル方針
ヲ變更セシムルコトハ頗ル困難ナリト思考ス然レトモ之レト同時ニ商議ヲ東京ニ移スハ尠ラサル
不利益ナル結果ヲ生スヘシ就テハ此上本官ノ執ルヘキ措置ニ付御訓令ヲ待ツ

○第十 (電信) 明治三十六年八月二十九日發

栗野全權公使

小村外務大臣

八月二十七日發貴電ニ關シ元來今般ノ商議ハ主義ニ關シテ細目ニ互ラサルモノナルカ故ニ之ヲ露

京ニ於テ繼續スルコトノ便宜ナルヘキハ帝國政府ノ依然トシテ信スル所ナリ貴官ハ此旨ヲ「ラム
スドルフ」伯ニ告ケ猶ホ貴官ト同伯トハ既ニ本件ニ就キ相當ノ委任ヲ受ケ且我提議ハ既ニ同伯ニ
提出セラレタルカ故ニ帝國政府ニ於テハ商議ノ場所ハ業已ニ協定ニ歸シタルコトト思考シ居タル
旨ヲ附言セララルヘシ因テ貴官ハ露京ニ於テ商議ヲ繼續セムトスル帝國政府ノ希望ヲ同伯ニ切述シ
露國政府ノ再考ヲ求メラルヘシ
且又「ラムスドルフ」伯カ本件商議ヲ東京ニ移サムコトヲ提議セラレタルノ事實ニ依リ露國政府ハ
我提案ヲ以テ商議ノ基礎ト爲スコトニ就キ大體上異議ナキモノト推測セララル貴官ハ帝國政府カ此
推測ヲ爲スニ於テ不當ナラサルヘキ旨ヲ同伯ニ述ヘラルヘシ

○第十一 (電信) 露京發明治三十六年八月三十一日

東京着同

九月 二日

小村外務大臣

栗野全權公使

本官ハ八月三十日「ラムスドルフ」伯ニ會見シ八月二十九日發御電訓ノ趣意ヲ十分ニ説述シタルニ
伯ノ答フル處要領左ノ如シ

本件ハ主義ノ問題ニ關スト雖モ而モ主義ナルモノハ地方的并ニ實際的問題ヲ審按シテ決セララルヘ
キモノナリ露國政府カ商議ヲ東京ニ移サムト決シタルハ主トシテ此理由ニ基キ「アレキシエフ」大

將ニ協議スルノ必要アルカ爲メナリ之ト同時ニ本件ハ日本ヨリ提議セラレタルコト故日本ニ敬意ヲ表スルノ意ニモ出テタルモノニシテ露都ニ於テ右提議ヲ受付ケタルコトハ同所ヲ以テ商議ノ地トナスノ意味ニハ非ス又商議ヲ東京ニ移サムトノ提言ハ必スシモ露國政府ニ於テ日本ノ提議ニ異議ナキコトヲ意味スルモノニ非ス商議ノ基礎ナルモノハ實際問題ヲ考量シタル上始メテ決定セラレルヲ得ヘク而シテ實際問題ニ關シテハ日本駐節ノ我公使及「アレキシエフ」大將ハ伯ニ優リタル知識ヲ有スト

本官ハ之ニ對シ一己ノ意見トシテ抑モ本件ハ最モ重大ナル至高政策ニ關スルモノナルヲ以テ其ノ決定ハ恐クハ皇帝陛下ノ親裁ニ依ルモノ多カルヘク從テ露都ニ於テ商議スル方便宜ナルヘシト思考ス故ニ商議ノ場所ヲ變更スルコトハ「ラムスドルフ」伯ニ於テ再考アラムコトヲ望ム是レ帝國政府ノ切ニ希望スル所ナリト述ヘ且本件ハ主義ノ問題ニ關シ併セテ國際政略問題ノ變理ニ關スルモノニシテ「アレキシエフ」大將ニ與ヘラレタル權力ノ範圍ニ屬セサルヘシトノ理由ヲ以テ商議地移轉ノ議ニ異議ヲ唱ヘ本官ノ記憶ニシテ誤ラスムハ「アレキシエフ」大將ノ職權ハ單ニ地方行政等ノ事項ニ限ラルル様伯ヨリ聞及ヒタリト思惟スル旨ヲ述ヘタルニ「ラムスドルフ」伯ハ今回ノ問題ニ就キ「アレキシエフ」大將ハ單ニ諮詢ヲ受クルノミニテ何事ヲモ決定スルモノニ非ス又可成速ニ本件ヲ決着セムコトハ伯ニ於テモ希望スル所ニシテ此レ即チ商議地ノ移轉ヲ提言シタル所以ナリト

答ヘ且對案ノ調製ハ地方的知識ヲ有スル人ニ依リテセラレサルヘカラサルヲ以テ茲ニ商議ヲ東京ニ移スニ決シタルハ本件ノ進行ヲ速カナラシムルノ目的ニ出タルモノナリ若シ當地ニ於テ商議ヲ行ハムニハ伯ノ外之ニ當ルモノナク然ルニ伯ハ陛下ニ扈從スルカ爲メ今秋ハ大抵當地ニ在ラサルヘク維也納及羅馬ヘ旅行ノ上ハ更ニ某國ニ旅行スルコトアルヘキヲ以テ頗ル商議ノ遷延ヲ來スヘシ然ルニ之ヲ東京ニ於テセムニハ伯ハ電信ニテ東京ニ訓令スルヲ得ヘク東京ヨリノ電信モ亦伯ノ行先何レニモ追隨スヘキナリ且夫レ當地ニ於ケル事務ノ處辦ハ貴公使等ノ熟知セララルル通り餘リ迅速ニハ非サルナリト答ヘラレタリ

終ニ臨テ伯ハ本日皇帝陛下ニ拜謁スヘキヲ以テ本官ノ述ヘタル協商速成ノ望マシキ理由ヲ陛下ニ奏上スヘク又露都ニテ商議ヲ行ヒタシトノ日本政府ノ特別ノ希望ヲ再ヒ陳奏スヘキモ此點ニ關シテハ從來屢次陳述シタル處ヨリ以外ノ結果ヲ期待スルヲ得サルヘシト思考スル旨ヲ追述セラレタリ

○第十二

(電信)

明治三十六年九月二日發

栗野全權公使

小村外務大臣

八月三十一日發貴電ニ關シ出來得ル丈ケ速ニ協商ヲ遂ケムコト既ニ兩國ノ希望ナルコト明カナル

以上未タ商議ノ基礎ノ受諾セラレタルモノナキニ之カ商議ヲ東京ニ移ストセハ帝國政府ハ之カ爲メ大ニ議事ヲ遷延セムコトヲ恐ル故ニ貴官ハ此旨ヲ「ラムスドルフ」伯ニ語り次テ帝國政府ハ業已ニ其ノ提議ヲ具體的ニ露國政府ヘ提出シタルカ故ニ縱令商議ハ何レノ地ニ於テ之ヲ行フトスルモ露國政府ニシテ先以テ我提案ハ主義上商議ノ基礎トシテ受諾セラレ得ヘキヤ否ヲ聲明セラレムニハ大ニ事ノ進行ニ便ナルヘシト信スル旨ヲ述ヘラルヘシ抑モ我提案ヲ商議ノ基礎トシテ受諾スルモ之カ爲メニ必要ト認ムル修正ノ提議ヲ妨ケラルヘキモノニアラス蓋シ斯ル受諾ハ單ニ事ノ發程點ヲ確定スルニ過キス而シテ如何ナル商議タルヲ問ハス先以テ其ノ發程點ヲ定メ置クコトハ便益ニシテ特ニ本件ノ如キ場合ニ在テハ極メテ緊要ナリトス

就テハ貴官ハ露國政府ヨリ右ノ聲明ヲ得ラルル様十分御盡力アラムコトヲ希望ス

○第十三

(電信)

露京發明治三十六年九月五日
東京着同 同 六日

小村外務大臣

栗野全權公使

本官ハ九月四日「ラムスドルフ」伯ト會見セリ九月二日發貴電御訓令ノ意義ニ關シ先方ノ誤解ヲ防キ且帝國政府ニ於テハ深ク本件ニ重キヲ措クモノナルコトヲ先方ニ領得セシメムカ爲メ本官ハ口上書ヲ作りテ之ヲ伯ニ手交シ然ル後伯ト長時間ノ談論ヲ爲シタリ伯ノ答辯ハ大要下ノ如シ即チ伯

カ露國外務省ニ於ケル四十年ノ經驗ニ依レハ國際商議ハ一國ノ提議ト他國ノ回答トノ上ニ行ハルルヲ常トシ一國ノ提議ヲ以テ商議ノ唯一ノ基礎トシテ受諾スルカ如キハ常例ニ非ス東京駐節ノ露國公使ハ業已ニ露國皇帝陛下ヨリ日本政府ノ提議ヲ審査シ同時ニ「アレキシエフ」大將ト協議シテ一ノ對案ヲ作成シ日本政府若シ商議ヲ始ムルヲ欲セハ其ノ提案ト我對案トヲ採リテ商議ノ基礎ト爲シ以テ直チニ商議ヲ開始スヘキ旨ノ勅命ヲ受ケ居レリト

本官ハ之ニ對シテ曰ク若シ露國政府ニシテ果シテ日本ト満足ナル協定ヲ爲サムトノ希望ヲ有スルニ於テハ其ノ商議委員ニ訓令シ日本ノ提議若ハ少クモ其ノ實質タル主義ヲ採テ基礎ト爲サシメ以テ本件ノ目的ヲ達スルニ便易ナラシムルコト極メテ緊要ナルヘシ蓋シ本官ノ感知スル所ニ依レハ「アレキシエフ」大將カ凡ソ満足ナル協商ヲ遂クルニ最モ緊要ナル和協ノ精神ヲ以テ日本ト商議ヲ試ミルノ意向アルヤ否ヤハ疑問ニ屬スルカ如シト

伯曰ク初メ露國政府カ日本ノ提議ニ接シタルニ際シ其ノ採ルヘキノ策ハ二途アリシノミ即チ之ヲ辭拒セン乎將タ之ニ就キ商議ヲ爲サン乎ノ二途是ナリ而シテ露國政府ハ其ノ第二策ヲ採リタリト雖モ是レ日本ノ提議ヲ全然受諾シタルノ意ニ非ス又其ノ主義ヲ受諾シタルノ意ニモ非ス去リナカラ既ニ協商ヲ爲サムトノ提議ニ同意シタルヲ以テ露國政府ハ日本ノ提案ヲ審査シ之カ對案ヲ作り以テ兩案ヲ商議ノ基礎トシテ用フルニ決シタルナリ加之日本案ノ或條項ハ露國ノ利益ト調和スル

コト能ハサルモノアリ、又ハ之カ修正ヲ要スルモノアリ、故ニ露國政府ハ其ノ對案ト共ニスルニアラ
スムハ日本提案ノ主義ヲスラ商議ノ基礎トシテ受諾スルコト能ハスト
前述ノ如ク本官ハ帝國政府ノ希望ヲ達セムカ爲メ十分ノ盡力ヲ爲シタルモ今ヤ「ラムスドルフ」伯
ヲシテ其ノ提言シタル針路ヲ變セシムルコト不可能ナルヲ確認セリ、就テハ帝國ノ採ルヘキ進路ハ
伯ノ發議ニ同意スルノ外之ナカルヘシト思料ス、伯ハ本月十日當府出發「ダルムスタット」ニ赴キ露
國皇帝陛下ニ供奉スル筈ナリ

○第十四 (電信) 明治三十六年九月七日發

栗野全權公使

小村外務大臣

栗野全權公使
和南遊東
失散

九月五日發貴電ニ關シ貴官ハ帝國政府ニ於テ商議ヲ東京ニ移スニ同意スル旨ヲ「ラムスドルフ」伯
ニ告ケ、同時ニ帝國政府ハ露國政府ヨリ「ローゼン」男ニ與ヘラレタル訓令ハ同男ヲシテ遲滯ナク露
國對案ヲ提出シテ直チニ商議ニ進ムヲ得セシムル底ノモノナルコトヲ信スル旨ヲ附言セララルヘシ

○第十五 (電信) 露京發明治三十六年九月九日
東京着同 同日

小村外務大臣

栗野全權公使

本官ハ九月九日「ラムスドルフ」伯ニ會見セリ、伯曰ク東京駐劄「ローゼン」公使及「アレキシエフ」大將
ハ業已ニ皇帝ノ命ニ因テ出來得ル限り速ニ對案ヲ作成シ、成ルヘク早ク商議ヲ開始スヘキ旨電訓セ
ラレタリ、就テハ今再ヒ同様ノ訓令ヲ送ルノ必要ハ之ナカルヘシト思考スト

○第十六 (電信) 明治三十六年九月二十四日發

栗野全權公使

小村外務大臣

「ローゼン」公使ハ本月二十二日旅順ニ向ケ出發セリ、出發前同公使カ本大臣ヨリ來訪シテ語ル所ニ據
レハ豫テ同公使ハ「アレキシエフ」總督及同公使ノ手ニテ作成中ナル露國對案ノ完成ヲ速カナラシ
ムル上ニ於テ旅順ニ赴クノ必要起リタル時ハ直チニ同地ニ向ケ出發シ得ル様用意シ置クヘキ旨ノ
勅命ニ基ケル訓令ニ接シ居リシカ、恰モ「アレキシエフ」總督ヨリ該件ニ付親シク協議ヲ遂ケムカ爲
メ旅順ニ渡來セムコトヲ請求シ來リタル趣ナリ、尙同公使ハ向フ十一日、内ニハ歸京ノ見込ナリト附
言セリ

○第十七 (電信) 明治三十六年十月五日發

栗野全權公使

小村外務大臣

ローゼン公使
日岸ニ赴ク
ニ赴ク

露國公使ハ本月三日旅順ヨリ歸來セルカ當日本大臣ヲ來訪シ「アレキシエフ」總督及同公使ヨリ提出ノ上露國皇帝陛下ノ允裁ヲ經タルモノナリトテ左記露國對案ヲ手交セリ

露國對案

第一條 韓帝國ノ獨立并ニ領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ并ニ第一條ノ規定ニ背反スルコトナクシテ韓國ノ民政ヲ改良スヘキ助言及援助ヲ同國ニ與フルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的及工業的企業ヲ阻礙セサルヘキコト及第一條ノ規定ニ背反セサル限り右企業ヲ保護スルカ爲メニ採ラレタル總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 露國ニ知照ノ上右同一ノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト但シ右軍隊ノ員數ハ實際必要ナルモノヲ超過セサルヘキコト且右軍隊ハ其ノ任務ヲ果シ次第直チニ召還スヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト

第五條 韓國領土ノ一部タリトモ軍略上ノ目的ニ使用セサルコト及朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度以北ニ在ル部分ハ中立地帯ト見做シ兩締約國孰レモ之ニ軍

隊ヲ引キ入レサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第七條 滿洲及其ノ沿岸ハ全然日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト

第八條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト

○第十八 (電信) 明治三十六年十月八日發

栗野全權公使

小村外務大臣

本大臣ハ我提案并ニ露國ノ對案ヲ基礎トシ且出來得ヘクムハ露國ヲシテ我提案ノ根本タル主義ヲ承認セシムルノ趣意ヲ以テ露國公使ト會商ヲ開始シタリ

○第十九 (電信) 明治三十六年十月十六日發

栗野全權公使

小村外務大臣

本大臣ハ露國對案ニ對スル修正トシテ左ノ各項ヲ提出シ之ニ關シ露公使ト商議ヲ進メツツアリ

一、露國對案第二條中「韓國ノ民政ヲ改良スヘキ助言及援助」ヲ「韓國ノ内政ヲ改良スヘキ助言及援助(但シ軍事上ノ援助ヲ含ム)」ト改ム

一、露國對案第三條中「商業的及工業的企業」ヲ「商業的及工業的活動ノ發達」ト改メ又「右企業ヲ保

護スル爲メ採ラレタルヲ是等ノ利益ヲ保護スル爲メ採ラルヘキニ改ム

一、露國對案第四條ヲ左ノ通り改ム

「前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛争ヲ起スヘキ叛亂若ハ騷擾ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト」

一、露國對案第六條ヲ左ノ通り改ム

「韓國ト滿洲トノ境界ニ於テ其ノ兩側各五十キロメートルニ互リ一ノ中立地帯ヲ設定シ右地帯内ニハ締約國孰レモ相互ノ承諾ナクシテ軍隊ヲ引キ入レサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト」

ト

一、露國對案第七條ヲ削除シ之レニ換ユルニ以下三個條ヲ以テスルコト

一、第七條 滿洲ニ於ケル清國ノ主權及領土保全ヲ尊重シ并ニ滿洲ニ於ケル日本ノ商業ノ自由ヲ妨害セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

一、第八條 日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ且前條ノ規定ニ背馳セサル限り該利益ノ保護ニ必要ナルヘキ措置ヲ露國ニ於テ採ルノ權アルコトヲ認ムルコト

一、第九條 今後韓國鐵道及東清鐵道ニシテ鴨綠江迄延長セラルルニ至ラハ該兩鐵道ノ連結ヲ阻礙セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

一、露國對案第八條ハ第十條ニ改ム

一、露國對案第八條ハ第十條ニ改ム

○第二十 (電信) 明治三十六年十月二十二日發

栗野全權公使

小村外務大臣

露國對案ニ對スル我修正ニ關シ「ローゼン」公使ト會商ノ結果左ノ如シ

露公使ハ第二條及第六條ニ對スル我修正ニ一應承諾ヲ與ヘ本國政府ノ認可ヲ仰クコトトナリ又

第三條ニ同意シ第四條ハ尙商議ヲ重ヌルコトトセリ露國對案第七條ニ對スル我修正中第七條ニ

關シテハ兩者互ニ他ノ提案ヲ受諾スルノ不可能ナルコトヲ固持シ何等合意ニ至ラス露國公使ノ

主張ハ左ノ如シ

一、露國對案第七條ハ韓國ニ關スル露國ノ讓歩ニ對スル唯一ノ補償ナリ

二、此點ニ關シ日本ノ修正ヲ容ルルハ露國カ從來固持シ來リタル主義即チ滿洲問題ハ露清間專

屬ノ案件ニシテ第三國ノ關涉ヲ許サストノ主義ニ反ス

之ニ對スル當方ノ主張ハ左ノ如シ

一、日本ハ滿洲ニ關シ露國ヨリ何等ノ讓與ヲ求ムルモノニ非ラス日本ノ提案ハ單ニ露國カ任意

ニ且累次聲明シタル主義ヲ條約ヲ以テ確認セムトスルニ過キス

二、日本ハ滿洲ニ於テ條約上ノ權利并ニ商業上ノ利益ヲ有ス、且又露國カ滿洲ヲ確然占領スルコトハ不絶韓國ノ獨立ヲ侵迫スヘシ、是故ニ日本ハ前述ノ權利及利益ノ安固ト韓國獨立ノ保障ヲ露國ヨリ得サルヘカラス、

○第二十一 (電信) 明治三十六年十月二十九日發

栗野全權公使

小村外務大臣

十月二十二日當方發電信ニ關シ其ノ後「ローゼン」公使ト會商ノ結果露國對案第四條ニ對スル修正ハ同公使ニ於テ遂ニ本國政府ノ承認ヲ條件トシテ同意ヲ與ヘタリ、第六條ニ關シテハ中立地域ヲ滿韓ノ境界各五十「キロメートル」ニ定メムトノ本大臣ノ提議ハ露國公使ニ於テ是亦第四條ト一樣ノ同意ヲ與ヘタリ、第七條ニ關シテハ彼我ノ意見未タ一致ニ至ラス

●第二十二 (電信) 明治三十六年十月三十日發

栗野全權公使

小村外務大臣

本大臣ハ本日露國對案ニ對シ帝國政府ノ確定修正案トシテ左ノ各項ヲ露公使ニ提出シタリ

第一條 清韓兩帝國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ、并ニ韓帝國ノ行政ヲ改良スヘキ助言及援助(但シ軍事上ノ援助ヲ含ム)ヲ同國ニ與フルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ商業的及工業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコト、及此等利益ヲ保護スルカ爲メニ採ラルヘキ總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛争ヲ起スヘキ叛亂若ハ騷擾ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第五條 朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト

第六條 韓國ト滿洲トノ境界ニ於テ其ノ兩側各五十「キロメートル」ニ互リ一ノ中立地帯ヲ設定シ、右地帯内ニハ締約國孰レモ相互ノ承諾ナクシテ軍隊ヲ引キ入レサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第七條 滿洲ハ日本ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ日本ニ於テ承認シ、韓國ハ露國ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第八條 日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ、并ニ此等利益ヲ保護スルカ爲メニ必要ナル措置ヲ採ルハ露國ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第九條 韓國トノ條約ニ因リ露國ニ屬スル商業上及居住上ノ權利及免除ヲ妨碍セサルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト并ニ清國トノ條約ニ因リ日本ニ屬スル商業上及居住上ノ權利及免除ヲ妨碍セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第十條 今後韓國鐵道及東清鐵道ニシテ鴨綠江マテ延長セラルルニ至ラハ該兩鐵道ノ連結ヲ阻礙セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第十一條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト

○第二十三 (電信) 明治三十六年十一月一日發

栗野全權公使

小村外務大臣

「ロ—ゼン」公使ハ十月三十一日本大臣ヲ來訪シ曩ニ本大臣ヨリ露國對案ニ對スル修正トシテ提出シタル我確定案ハ同公使訓令ノ範圍外ニ屬スルヲ以テ十一月一日該案ノ全文ヲ本國政府ニ電報シ何分ノ訓令ヲ請フヘキ旨ヲ告ケタリ就テハ貴官ハ可成速ニ外務大臣代理ニ面見シ左ノ通り陳述セラレヘシ

帝國政府ハ修正案ヲ作製スルニ方リ露國政府ノ希望ヲ十分酌量スルヲ怠ラザリキ
帝國政府カ韓國ト同様ニ清國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スヘシトノ相互的約定ヲ提議シタルハ單

ニ露國カ業已ニ任意ニ與ヘタル聲明ノ確認ヲ得ムトスルマテナリ而モ露國カ韓國ニ關シテハ右様ノ約定ヲ爲スノ意ナルニ顧ミルトキハ其ノ清國ヲ除外セムトスルノ理由ハ了解ニ苦マサルヲ得ス抑モ滿洲問題カ帝國ノ權利ト利益トニ關涉セサル限り帝國政府ハ之ヲ以テ純然タル露清間ノ案件ト爲スニ異議ナキモ奈何ニセム帝國ハ該地方ニ於テ廣大且重要ナル權利及利益ヲ有ス故ニ滿洲ヲ以テ其ノ特殊利益ノ範圍外ト宣言スルニ方リ對清條約上帝國ニ屬スル通商及居住上ノ權利ト免除ニ對シ妨碍ヲ加ヘサルヘキ旨ノ保證ヲ露國ニ求ムルハ帝國政府カ至當ト信スル所ナリ

次テ貴官ハ今回商議ノ基因タル帝國政府提議ノ主意ハ極東ニ於テ日露ノ利益相接觸スル地方ニ於ケル兩國ノ特殊利益ヲ劃定セムトスルニアリ露國政府カ右ノ提議ニ應スルニ方リ露國對案第七條ニヨリ推測シ得ヘキカ如ク該劃定ヲ以テ單ニ日本カ特殊利益ヲ有スル地方ノミニ限ラムコトヲ欲セラレムトハ帝國政府ノ毫モ豫期セザリシ所ナルヲ指摘セラレヘシ

○第二十四 (電信) 露京發明治三十六年十一月三日

東京着同

同日

小村外務大臣

栗野全權公使

本官ハ十一月二日外務大臣代理ニ面會シタルニ同大臣代理ハ其ノ一己ノ説トシテ日本ノ要求ハ前

後同一ニシテ唯其ノ形體ヲ異ニスルノミ且其ノ求ムル處過多ナリ云々ト語レリ依テ本官ヨリ日本ノ求ムル所ハ其ノ滿洲ニ於テ現ニ有スル所ノ條約上ノ權利及免除ノ承認ニ過キサルニ如何ナル點ヲ以テ過多ナル要求ト思考セラレルヤト問ヒタルニ大臣代理ハ其ノ事ニ關シテハ「ローゼン」公使ニ於テ何等述フル所ナシ唯茲ニ一ノ難事トスルハ滿韓鐵道ノ接續是ナリト答ヘタルニ付更ニ其ノ他ニハ何等故障ナキヤト問ヒタルニ鐵道問題ハ「ローゼン」公使ニ於テ本國政府ノ承認ヲ條件トシテ一應肯諾シタリト雖モ是レ實ニ唯一ノ難點ナリト答ヘタリ

終ニ臨ミ本官ハ帝國政府ニ於テハ十分ニ交讓ノ精神ヲ懷抱スルヲ以テ外務大臣代理ニ於テモ這般問題ヲ満足ニ解決セムカ爲メ盡力セラレタク「ラムスドルフ」伯ニモ其ノ意ヲ以テ進言シ又若シ能フヘクムハ皇帝陛下ニモ陳奏セラレタキ旨ヲ請ヒタルニ同大臣代理ハ喜ムテ爾カセムト答ヘ且「ラムスドルフ」伯モ今週ノ末ニハ歸府アルヘシト語レリ

○第二十五

(電信)

露京發明治三十六年十一月十三日
東京着同日

小村外務大臣

栗野全權公使

十一月十二日「ラムスドルフ」伯ニ會見談話ノ要領左ノ如シ

本官 過日外務大臣代理「オポレンスキ」公爵ニ手交シ置キタル電文寫ハ御接手相成リタルコ

トト信ス右ニ就テハ何分ノ御措置アリタルヤ否ヤ

伯 右ハ皇帝ノ叡覽ニ供ヘ置キタリ又「ダラムスタット」出發前勅命ニ依リ「ローゼン」公使ニ對シ引續キ日本政府ト商議ヲ行フヘキ旨訓令ヲ發送シタリ

本官 「ローゼン」公使ヘハ日本ノ確定修正案ヲ基礎トシテ商議ヲ進行スル様御訓令相成リタル義ナルヤ

伯 「ローゼン」公使ハ「アレキシエフ」大將ト共ニ貴方ノ提案ヲ審査シ且若シ必要アルニ於テハ之ニ修正ヲ加フヘキ旨皇帝ヨリ命セラレタルナリ思フニ目下該官等ハ對案ノ調製ニ從事シ居ルコトナラム

本官 「オポレンスキ」公爵ノ談話ニ依レハ貴我ノ所見歸一ニ至ラサルハ滿韓鐵道連結ノ件ノ爲メナル趣ナレトモ日本政府ハ其ノ後右ニ關スル條項ニ變更ヲ加ヘタルコト故該問題カ双方ノ意見妥協ヲ妨クル主因ナリトハ自分ノ信スル能ハサル所ナリ

伯 予ノ見ル所ヲ以テスルニ協商成立ヲ妨クルモノハ滿洲問題ナリトス予カ當初ヨリ言ヒ來レル如ク露國政府ハ常ニ此問題ヲ以テ全然露清兩國間ノ案件ト認ムルモノナリ隨テ清國ト協商ヲ遂ケ以テ滿洲ニ於ケル優越ノ利益ヲ擁護スル爲メ適當ナル一切ノ措施ヲ爲スノ權ハ之ヲ我露國政府ニ保留セサルヲ得サルナリ

本官 我方ニ於テハ常ニ滿洲ニ於テ露國ノ有スル特殊且著大ナル利益ヲ承認スル積リナリ又右等ノ利益ヲ侵サムトスル意思更ニ之アルナシ然レトモ清國ノ獨立及領土保全ノ尊重セラルヘキコト并ニ滿洲ニ於ケル我權利及利益ニ對シ正式ノ保障ヲ要求スルハ我至當ノ權利ナリトス伯 本件ニ關スル露國ノ異議ハ「實質」ニ對スルモノニアラス寧ロ「形式」ニ關スルモノナリ滿洲ニ於テハ他國モ亦權利ト利益ヲ有ス然レトモ之カ爲メニ滿洲ニ關シ此等ノ諸國トノ間ニ一特別ノ協定ヲ爲スハ露國ノ能クセサル所ナリ

本官 露國政府已ニ實質ノ點ニ於テ我レト所見ヲ一ニストセハ單ニ形式ニ關シ貴我ノ意見一致セサルノ故ヲ以テ兩國協商ノ成立ヲ見ル能ハサルカ如キハ深ク遺憾トセサルヘカラス就テハ露國自ラ已ニ容認シタル主義ニ由リ満足ナル解決ヲ見ル様伯ニ於テ盡力アラムコト本官ノ偏ニ熱望スル所ナリ

○第二十六 (電信) 明治三十六年十一月二十一日發

栗野全權公使

小村外務大臣

「ローゼン」男ハ十一月二十日日本大臣ニ告グルニ「アレキシエフ」總督ハ既ニ對案ヲ露國政府ヘ差出シタリトノ電報去十四日同總督ヨリ接到シタリ尤モ右對案ニ關シテハ未タ何等ノ訓令ニ接セサル旨ヲ以テセリ

右ノ次第ニ付貴官ハ可成速ニ「ラムスドルフ」伯ニ會見ノ上前段「ローゼン」男ヨリ談話ノ次第ヲ叙述シ帝國政府ハ出來得ル丈迅速ニ談判ヲ進行セムコトヲ切望スル旨ヲ述ヘ且遲滞ナク談判ヲ繼續シ之レカ終結ヲ期セムカ爲メ速ニ「ローゼン」男ヘ發訓ノ運ニ至ル様盡力セラレムコトヲ伯ニ促サル可シ

○第二十七 (電信) 露京發明治三十六年十一月二十二日 東京着同 二十三日

小村外務大臣

栗野全權公使

今二十二日「ラムスドルフ」伯ニ會見シタル處伯ハ日本確定案ニ對スル修正ハ已ニ皇帝陛下ノ御手許ニ達シ居レトモ目下皇后陛下御不豫ノ爲メ一切ノ事務ヲ御覽遊ハサレサルヲ以テ自然遲延ヲ來セリト云ハレタルニ付本官ハ本問題ニ關シ可成速ニ勅裁有之様伯ノ盡力ヲ請ヒタルニ伯ハ御電訓ノ次第ヲ公文ニテ本官ヨリ伯ニ照會セハ直チニ之ヲ皇帝ニ奏上スヘキ旨答ヘラレタリ於是本官ハ「アレキシエフ」大將ヨリ提出シタル修正個條ノコトヲ尋ネタルニ伯ハ直接ノ答ヲ爲スニ當惑シタル模様ニテ下ノ如ク答ヘラレタリ即チ韓國ニ關シテハ露國ハ日本ト直接ノ協定ヲ遂ケ以テ多大ノ讓歩ヲ爲スヲモ辭セサルモノナレトモ滿洲ニ關シテハ爾カスル能ハス露國ハ一旦征服

ノ權利ニ依テ滿洲ヲ占領シタルニモ拘ハラヌ猶ホ之ヲ清國ニ還附セムトスルモノナリ但シ滿洲ニ於ケル我莫大ナル利益ノ安固ニ付或種ノ保障ヲ要スルハ勿論ナリ而シテ清國ニ於テ右保障ヲ與フルヲ拒ミツツアル今日、露清間專屬ノ案件タル滿洲ニ關シテ第三國トノ間ニ何等協定ヲ爲サムコトハ到底我露國ノ能クスル所ニ非ルナリ云々ト之ニ對シ本官ハ我日本ノ提案ニ就キ本官ノ解スル所ニ據レハ我政府ノ意思ハ露清兩政府間ノ直接交渉ニ干與セムトスルニ非ス是レ我確定案第七條ノ前部ヲ見ルモ明ナル所ナリ我方ノ欲スル所ハ露國カ屢次聲明シタル清國ノ獨立及保全ト滿洲ニ於ケル我重要ナル利益ノ安固トニ在リ是レ露清兩國間ノ事件ニ干與スルニ非スシテ日露兩國共ニ多少ノ利益ヲ有セル滿洲ニ於テ兩國間ノ誤解ヲ豫防セムトスルニ外ナラスト述ヘ尙ホ何等カノ形式ニ由リ主義上ナリトモ如上ノ協調成立シ得ムニハ露清間ノ交渉ト雖モ尙且爲メニ其ノ進行ニ一段ノ便易ヲ見ルコトナラムト附言シタルニ伯ハ前云ヘル如ク本官ヨリ公文ヲ以テ本國政府ヨリ來訓ノ次第并ニ之ニ關スル本官ノ意見ヲ伯ニ致スコトトセラレタク左スレハ該公文ヲ直チニ皇帝ニ轉送スヘシト再言シ尙ホ伯ニ於テハ來ル二十五日「スケルネヴィス」ニ於テ皇帝ニ謁見ノ筈ナリト語ラレタリ右ノ公文ハ多分今夕頃伯ニ送付シ得ヘシ

右會談ノ模様ヨリ察スルニ「アレキシエフ」大將ノ提出シタル修正ハ清國及滿洲ニ關スル我提議ニ取リテハ好都合ノモノニ非ルヘシト思ハル

○第二十八 (電信) 明治三十六年十一月二十八日發

栗野全權公使

小村外務大臣

十一月二十二日發貴電ニ據レハ「ラムスドルフ」伯ハ本月二十五日皇帝ニ謁見ノ筈ナリト云フ就テハ貴官ハ可成速ニ伯ニ會見ノ上「ローゼン」男へ訓令發送ノ件ニ關シ何等ノ措置ヲ採ラレタルヤ否問合サルヘシ

○第二十九 (電信) 露京發明治三十六年十一月二十七日 東京着同 二十八日

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ皇帝陛下ニ謁見ノ爲メ十一月二十五日行在所ニ赴ク筈ナリシカ皇后陛下御病氣ノ爲メ見合ハセタル旨本官ニ語ラレタリ皇后陛下ノ御病氣ハ右耳内部焮腫ニシテ手術ノ必要アリト云フ

十一月二十二日發拙電ニテ稟報ノ通り本官ヨリ同伯ニ宛テタル公文ハ直ニ之ヲ皇帝ノ御手許ニ轉送シタル旨是又同伯ヨリ聞及ヘリ

○第三十 (電信) 明治三十六年十二月一日發

栗野全權公使

小村外務大臣

日露間交渉問題ノ速決ハ帝國政府カ當初ヨリ極メテ重視シタル所ナリ蓋シ斯ノ如キ重大ノ案件ニ於テハ其ノ解決ノ満足スヘキモノタルヲ要スルハ勿論ナレトモ其ノ終結ノ迅速ナラムコトモ亦之ニ次テ大切ナリトス是故ニ帝國政府ハ今日迄ノ交渉中露國政府ノ提言ニ對シテハ總テ之ニ速答ヲ與フル事ニ特ニ注意シ來リタリ然ルニ日露交渉モ懸案已ニ四個月ノ久シキニ互リ而カモ其ノ終局ノ如何ハ未タ確然豫見シ得ルノ域ニ達セス事情既ニ此ノ如シ帝國政府ハ職トシテ交渉遷延ニ因由セル現下ノ形勢ニ對シ憂懼ヲ起ササラムトスルモ禁スル能ハス是故ニ貴官ハ成ルヘク速ニ「ラムスドルフ」伯ニ會見ヲ求メ最モ痛切ニ前顯ノ次第ヲ説示セラルヘク尙ホ我政府カ斯ノ如ク胸襟ヲ披テ現下ノ時勢ヲ露國政府ニ説明スルハ即チ之ヲ以テ大局ニ裨補スル所以ト信スルニ由ル旨ヲモ附言セラルヘシ

○第三十一 (電信) 露京發明治三十六年十二月二日 東京着同 同日

小村外務大臣

栗野全權公使

本官ノ聞ク所ニ據レハ露國政府ハ今猶ホ「アレキシエフ」總督ト頻繁ニ通信ヲ重ネ居レリト云フ

○第三十二 (電信) 露京發明治三十六年十二月四日 東京着同 同日

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ十二月三日夜本官ヲ接見セリ其ノ際本官ハ十二月一日發御電訓ノ佛譯ニ添ユルニ帝國政府カ懸案問題ノ速決ヲ緊要ト認ムル所以ノ事態ヲ十分ニ説明セル書面ヲ以テシ之ヲ伯ニ手交シタルニ伯ハ本問題ニ就テハ尙ホ考量ヲ要スルコトアリ「アレキシエフ」總督ト交渉中ナリト述ヘ尙ホ皇帝陛下ハ十二月五日御還幸ノ筈ニ付次週ノ火曜日(十二月八日)ニ於ケル拜謁ノ際本件ノ緊急ヲ要スルコトヲ詳細具奏スヘク然ル上ハ在日本露國公使ニモ訓令ヲ發スルコトヲ得ルナラムト考フル旨答ヘラレタリ依テ本官ハ伯ニ於テ右日取以前ニ陛下ニ拜謁スルヲ得サルヤヲ問ヒタルニ伯ハ今週土曜日ハ當國皇嗣ノ祝祭日ニシテ日曜日ハ休日ニ當リ月曜日ニハ他ノ用務ヲ有ス云々ト答ヘ拜謁ノ結果ハ來ル水曜日(十二月九日)ヲ以テ本官ニ知ラシムヘシト約セラレタリ

○第三十三 (電信) 露京發明治三十六年十二月九日 東京着同 十日

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ十二月九日日本官ニ語テ曰ク「アレキシエフ」總督ノ提案ヲ基礎トシテ談判ヲ繼續

スヘキ旨ノ勅命昨八日ヲ以テ同總督及「ローゼン」公使ニ送致セラレタリ尤モ日本ノ提案ニモ十分ノ考量ヲ加ヘタルナリト

本官ハ露國提言ノ性質ヲ知ルヲ得可キカト問ヒタルニ「ラムスドルフ」伯ハ右ハ二三日中ニ「ローゼン」公使ヲ經テ公然日本政府ヘ提出セララルヘシト答ヘラレタリ

●第三十四 (電信) 明治三十六年十二月十二日發

栗野全權公使

小村外務大臣

露國公使ハ昨十一日日本大臣ヲ來訪シ本國政府ノ訓令ニ依リ我確定修正案(十月三十日當方發電信所報)ニ對スル復答トシテ左記露國政府ノ對案ヲ公然提出シタリ

一月七日大藏省
伊藤山縣相
ハ露國提言ニ
首相伊藤山縣

第一條 韓帝國ノ獨立并ニ領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ并ニ民政ヲ改良スヘキ助言ヲ以テ韓國ヲ援助スルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於ケル日本ノ工業的及商業的活動ノ發達ニ反對セサルヘキコト并ニ此等ノ利益ヲ保護スルカ爲メ措置ヲ執ルコトニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛争ヲ起シ得ヘキ叛亂若ハ騷擾ヲ鎮定スルノ目的ヲ以テ

韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利タルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第五條 韓國領土ノ一部タリトモ軍略上ノ目的ニ使用セサルコト及朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度以北ニ在ル部分ハ中立地帶ト見做シ兩締約國孰レモ之ニ軍隊ヲ引キ入レサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

●第三十五 (電信) 明治三十六年十二月二十一日發

栗野全權公使

小村外務大臣

十二月二十一日露國公使トノ會見ニ於テ本大臣ハ我カ原提案ト露國ノ新對案トノ間ニ協商ノ地理的範圍ニ關シ根本ノ差異アルヲ指示シ且帝國政府カ極東ニ於テ日露兩帝國ノ利益相接觸スル總テノ地方ヲ今回ノ協商ニ入ルルコトヲ以テ一般ノ利益ノ爲メ希望スヘキ義ト思惟スルニ至リタル所以ヲ十分ニ説明シタル上本大臣ハ露國政府カ此點ニ關シ其ノ態度ヲ再考セムコトヲ希望スル旨言明シタリ本大臣ハ又帝國政府カ露國ノ新對案ニ加フルヲ必要ト認メタル修正ノ個條ヲ同公使ニ詳述シタリ就テハ露國政府ヲシテ帝國政府ノ態度ニ關シ何等誤解ヲ生スルコトナカラシメムカ爲メ貴官ヨリ左ノ趣旨ノ口上書ヲ「ラムスドルフ」伯ニ提出セララルヘシ

本月十一日提出セラレタル露國新對案ハ帝國政府ニ於テ慎重ニ考查ヲ加ヘタリ而シテ露國政府カ本案協商ノ範圍ヲ日本カ視テ以テ必要不可缺ト爲ス所ノ地域ニ及ホスコトニ同意セラレサリシハ帝國政府ノ遺憾トスル所ナリトス

初メ帝國政府ハ去ル八月ヲ以テ露國政府ニ提言スルニ當リ帝國政府ノ希望ハ凡ソ極東ニ於テ日露兩國ノ利益相接觸スル地域ハ悉ク取り來テ之ヲ本案協商ノ範圍ニ入レ以テ日露兩國ノ關係上將來誤解ヲ生スヘキ一切ノ原因ヲ除去セムトスルニ在ルコトヲ最モ明瞭ナラシムルニ努メタリ然リ而シテ此希望タル此際該協商ヨリ右地域ノ一大要部ヲ全然除去スルニ依テ其ノ成就ヲ見ルヲ得ヘシトハ帝國政府ノ信スル能ハサル所ナリ是レ帝國政府カ本件ニ關シ露國政府ノ再考ヲ促スノ已ムヲ得サルニ至リタル所以ニシテ而シテ帝國政府ハ露國政府ニ於テ能ク本問題ノ満足ナル解決ヲ見ルニ至ルヘキ方法ヲ按出シ得ムコトヲ希望スルモノナリ

帝國政府ハ又露國新對案ニ對シ左ノ修正ヲ求ムルノ必要ヲ認ム

一、第二條ハ「露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ并ニ韓帝國ノ行政ヲ改良スヘキ助言及援助ヲ與フルハ日本ノ權利タルコトヲ承認スルコト」トナスコト

二、第五條ハ「朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト」トナスコト

三、第六條ヲ削除スルコト

右修正中ノ重モナル點ハ東京ニ於テ已ニ一應ノ協議纏リタル修正ノ程度ヲ超ユルモノニアラサルノミナラス右等ノ變更ハ帝國政府ニ於テ必要不可缺ト認ムル所ナルヲ以テ露國政府ニ於テモ異議ナク之ニ同意ヲ與ヘラルヘキコトト信ス

右ノ口上書ヲ「ラムスドルフ」伯ニ提出スルニ方リ貴官ハ伯ニ向テ本大臣ヨリモ右ト同様ノ意味ニテ「ローゼン」公使ニ談話シタルコトヲ告ケ且本件ニ就キ速ニ回答アラムコトヲ希望スル旨附言セラルヘシ

○第三十六

(電信)

露京發明治三十六年十二月二十三日 東京着同 二十四日

小村外務大臣

栗野全權公使

十一月二十三日
栗野公使
ラクスセル伯
會見セリ

御訓電ニ接シ今二十三、三日午後二時「ラムスドルフ」伯ニ會見シタリ伯曰ク「ローゼン」公使ノ來電ニ據レハ同公使ハ小村男爵ト會見シタル由但シ委細ハ後電トアリテ其ノ後電ハ未着ナリト次テ本官ヨリ口上書ヲ伯ニ手交シタルニ伯ハ之ヲ領シ露國ノ回答ハ出來得ル限り速ニ發送スルコトニ盡力スヘク尤モ「アレキシエフ」總督ニ問合セノ必要アリト云ヘリ

終ニ臨テ本官ハ伯ニ向ヒ現下ノ情勢ニ於テハ若シ協商ヲ遂ルコト能ハサルトキハ重大ナル困難否

栗野協商
道ル能ハシ
重々自難ク
葛藤ヲ生起セサルニ限ラサルヘケレハ伯ニ於テモ希望ノ目的ニ達セムカ爲メ十分盡力セラレ

ムコトヲ切望スル旨ヲ述ヘタリ

三十八

○第三十七 (電信) 露京發明治三十七年一月一日 東京着同 同日

小村外務大臣

栗野全權公使

露國政府
我權全寄
議中

本官ハ一月一日「ラムズドルフ」伯ニ會見シ我カ最近ノ提案ニ關シ何等措置セラレタル所アルヤ否ヲ尋ネタルニ伯ハ露國政府ハ該提案ヲ十分審議シ居レリト答ヘ且「ローゼン」公使ヘハ友好協ノ精神ヲ以テ商議ヲ進行スヘキ様遲滞ナク訓令ヲ發スヘキ旨ヲ閣下ニ確保セムコトヲ本官ニ求メ尙ホ伯ニ於テハ日露兩國カ妥協ニ至リ得サル理由一モ之アルヲ見スト附言セラレタリ

●第三十八 (電信) 明治三十七年一月七日發

栗野全權公使

小村外務大臣

「ローゼン」公使ハ十二月二十一日ノ我提案ニ對スル露國政府ノ復答ヲ一月六日日本大臣ニ手交セリ即チ左ニ記スル所是ナリ

露國對案第二條ニ關スル日本帝國政府ノ修正ニ對シテハ異議ナシト雖モ露國政府ハ左ノ二個條

ヲ維持スルヲ必要ト思考ス即チ

(一)ハ第五條原案ニシテ右ハ日本帝國政府ノ業已ニ同意セラレタル處ニ係ル其ノ條文ハ次ノ如シ

韓國領土ハ一部タリトモ軍路上ノ目的ニ使用セサルコト及朝鮮海峽ノ自由航行ヲ迫害シ得ヘキ兵要工事ヲ韓國沿岸ニ設ケサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

(二)ハ中立地帯ニ關スル第六條ナリ(本條ハ即チ日本帝國政府ニ於テモ均シク目的トセララル處タル「將來誤解ヲ起シ得ヘキモノハ總テ之ヲ除去スル」目的ニ出テタルモノニシテ例ヘハ中央亞細亞ニ於ケル露英領地間ニモ亦同様ノ地帯アリ)

上記ノ條件ニシテ同意セララルルニ於テハ露國政府ハ左ノ趣意ノ一個條ヲ本案協約中ニ挿入スルコトヲ承諾スヘシ即チ

滿洲及其ノ沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト同時ニ露國ハ滿洲ノ區域内ニ於テ日本又ハ他國カ其ノ清國トノ現行條約ノ下ニ獲得シタル權利及特權(但シ居留地設定ヲ除ク)ヲ享有スルコトヲ阻礙セサルヘキコト

○第三十九 (電信) 明治三十七年一月十三日發

三十九

栗野全權公使

小村外務大臣

貴官ハ本大臣カ本月十三日「ローゼン」男へ開陳シタル意見ヲ確ムル爲メトシテ左ノ口上書ヲラム
スドルフ「伯」へ交付セララルヘシ

帝國政府ハ平和ニ時局ヲ解決シ兩國親交ノ基礎ヲ永久ニ確立スルコト并ニ帝國ノ權利及利益ヲ
保護スルコトヲ目的トシ此見地ニ基キテ本月六日「ローゼン」男閣下ヨリ交附セラレタル露國
政府ノ回答ニ對シ最モ慎重周密ニ考量ヲ加ヘタルカ其ノ結果左ノ如ク修正ヲ行フヲ必要ト思
考ス

一露國對案第五條ハ其ノ前半即チ「韓國領土ノ一部タリトモ軍略上ノ目的ニ使用セサルコト」ノ
一句ヲ削除スルコト

二露國對案第六條中立地帶設定ニ關スル條項ハ其ノ全文ヲ削除スルコト

三滿洲ニ關スル露國政府ノ提議ハ左ノ如ク修正シ之ニ同意スルコト

「滿洲及其ノ沿岸ハ日本ノ利益範圍外ナルコトヲ日本ニ於テ承認スルコト但シ露國ハ滿洲ノ
領土保全ヲ尊重スルコトヲ約スルコト

露國ハ滿洲ノ區域内ニ於テ日本又ハ他國カ其ノ清國トノ現行條約ノ下ニ獲得シタル權利及特
權ヲ享有スルコトヲ阻礙セサルヘキコト

韓國及其ノ沿岸ハ露國ノ利益範圍外ナルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

四露國對案ニ左ノ一條ヲ加フルコト

「日本ハ滿洲ニ於ケル露國ノ特殊利益ヲ承認シ并ニ此等ノ利益ヲ保護スル爲メニ必要ナル措
置ヲ取ルハ露國ノ權利タルコトヲ承認スルコト

以上修正ノ理由ハ帝國政府ニ於テ從來屢屢餘蘊ナク説明セル所ナルヲ以テ露國政府ノ再考ヲ切
望スルノ外重ネテ陳辯ヲ要セスト思考ス唯右ノ内居留地設定ニ關スル制限ヲ削除セルハ日清追
加通商航海條約ニ抵觸スルカ爲メナリ尤モ居留地設定ニ就テハ他國ニ於テモ既ニ其ノ權利ヲ有
シ居ルカ故ニ日本ハ他國ト均一ノ取扱ヲ受クレハ之ニ満足スヘシ尙又露國政府回答中帝國政府
ハ既ニ露國對案第五條ニ對シ同意ヲ與ヘタル旨ヲ記シアルモ右ハ露國政府ノ誤解ニシテ帝國政
府ハ曾テ同意ヲ與ヘタルコトナシ

終ニ臨ミ帝國政府ハ全然和協ノ精神ヲ以テ前記修正ヲ提出スルモノナルカ故ニ露國政府ニ於テ
モ同一ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘラレムコトヲ期待シ同時ニ此上時局ノ解決ヲ遷延セシムルコトハ
兩國ノ爲メ極メテ不利益ナルカ故ニ可成速ニ復答ヲ與ヘラレムコトヲ希望ス

○第四十

(電信)

明治三十七年一月二十三日發

栗野全權公使

小村外務大臣

貴官ハ我カ最近ノ口上書ニ對スル露國ノ回答カ凡ソ如何ナル性質ノモノニシテ又其ノ回答ハ何日頃交付セラルヘキヤニ就キ「ラムスドルフ」伯ノ意見ヲ確メラルヘシ

○第四十一 (電信)

露京發明治三十七年一月二十五日
東京着同日

小村外務大臣

栗野全權公使

一月二十三日發貴電ニ關シ本官ハ一月二十四日「ラムスドルフ」伯ニ面會シ我最近提案ニ對スル伯ノ意向ヲ問ヒ尙ホ露國回答ハ何日頃與ヘラルヘキカヲ試問シタリ伯ハ巨細ノ問題ニ立入り談話スルコトヲ好マサル風ヲ示シ或點ニ關シテハ同意シ難キコトアリト答ヘタルノミ伯ハ其ノ意見ヲ來ル火曜日(一月二十六日)皇帝ニ陳奏シ遠カラサル内ニ回答ヲ發シ得ヘキ見込ナル由
本官ハ今午後「ド、ハートウツグ」氏(政務局長)ニ面會シタルカ氏ハ露國外務省ハ今尙ホ「アレキシエフ」總督ト協議中ニシテ日本ニ對スル回答ノ何日頃發セラルヘキヤハ未タ豫言スルコト能ハスト云ヘリ

○第四十二 (電信)

明治三十七年一月二十六日發

栗野全權公使

小村外務大臣

懸案問題ノ解決ヲ際限ナク遲延スルハ目下ノ時局ニ於テ容ササル所タルヲ以テ貴官ハ可成速ニ「ラムスドルフ」伯ニ會見ヲ求メ政府ノ訓令トシテ左ノ通り開陳セラルヘシ
帝國政府ノ見ル所ニヨレハ現下ノ時局ヲ此上遷延セシムルハ益々其ノ重大ヲ加フル所以タルニ過キス故ニ帝國政府ハ速ニ露國ノ回答ニ接セムコトヲ切望ス而シテ右回答ハ何日頃帝國政府ニ致サルヘキカ承知スルヲ得ハ幸ナリ

○第四十三 (電信)

露京發明治三十七年一月二十六日
東京着同日

小村外務大臣

栗野全權公使

一月二十六日發貴電ニ關シ露國外務大臣ハ日ク陸海兩相及他ノ關係官ハ時局問題討議ノ爲メ一月二十八日會合シ其ノ決議ヲハ皇帝ニ上奏シテ裁可ヲ請フ筈ナリ「アレキシエフ」大將モ來會ノ筈ナリシカ今ハ見合トナリシヲ以テ同大將ノ意見ハ程ナク電信ニテ到達スルナラム右ノ次第ニテ日本ヘ回答ノ期日ハ之ヲ確言スル能ハサルモ甚シキ遲延ヲ見ルナカルヘキ丈ハ言明シテ差支ナシト同大臣ハ又其ノ筋ヨリノ報告ニ據レハ日本ハ多數ノ軍隊軍器及軍需品ヲ韓國ニ派送セルカ如シ右ニ關シ本官ヨリ何等説明ヲ聽クヲ得ヘキヤト尋ネラレタルニ付本官ハ單ニ是等ノ事實ニ就テハ更

ニ承知スル所ナク何等ノ説明ヲ爲シ得サルヲ遺憾トスト答ヘ置キタリ同大臣ハ尙ホ兩國政府カ誠實ニ重要ナル商議ヲ進行セシメツツアル間ニ於テ日本カ斯様ノ行動ヲ爲サムニハ甚シキ惡感ヲ與フルコトヲ免カレサルヘシト附言セラレタリ右ノ報道ハ果シテ事實ナルヤ否本官ノ心得迄ニ御電報アリタク自然事實ナルニ於テハ其ノ詳報ヲ得タシ

○第四十四 (電信) 明治三十七年一月二十八日發

栗野全權公使

小村外務大臣

一月二十六日發貴電ニ關シ貴官ハ速ニ「ラムスドルフ」伯ニ會見シ本國政府ノ訓令トシテ日本カ多數ノ軍隊、軍器并ニ軍需品ヲ韓國ニ送リタリトノ說ヲ斷然否認セラルヘシ實際日本ハ近頃韓國ニ軍隊ヲ派遣シタルコト更ニ之アルナク又現在韓國駐屯日本軍隊ノ普通用途ニ必要ナル數額以外ニ彈藥ヲ送リタルコトナシ貴官ハ尋テ「ラムスドルフ」伯ニ向テ露國軍隊カ韓國國境ニ集中セラレツツアリトノ報ノ眞實ナルヤ否ヲ尋ネ而シテ若シ右ノ事實トスルトキハ此種ノ軍事運動ハ大ニ不可トセサルヘカラスト述ラルヘシ

終ニ臨テ貴官ハ「ラムスドルフ」伯ニ對シ貴官一己ノ心得マテニ一月二十八日ニ於ケル露國大臣會議決議ノ性質如何ヲ承知シ得ヘキカ將又露國回答ハ凡ソ幾日頃ヲ以テ與ヘラルヘキカ大約ノ日取ヲ指示サルヘキ乎否尋問セララルヘシ

○第四十五 (電信) 露京發明治三十七年一月二十八日 東京着同 二十九日

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ハ我説明ニ満足セリ鴨綠江附近ニ於ケル露軍集中ノ件ニ就テハ伯ハ之ヲ信セスシテ此種ノ新聞報道ハ頗ル遺憾トスヘシト云ハレタリ本官ハ今二十八日ノ大臣會議ノ議決ニ關シ聞ク所アラムト試ミタルニ伯ハ會議ノ結果ハ議決トシテ之ヲ皇帝ニ奏上スルモノニアラス關係大臣ニ於テ各自本件ニ就キ皇帝ニ引見セララル次第ニ付夫レ迄ハ何事モ確言スルヲ得スト答ラレタリ伯ハ又「アレキシス」太公及海軍大臣ハ來週月曜日(二月一日)ニ陸軍大臣及伯自身ハ火曜日(二月二日)ニ各陛下ニ謁見スヘク而シテ火曜日ニハ露國ノ回答ヲ「アレキシエフ」總督マテ送致スルヲ得ルナラムト思料スト云ハレタリ本官ハ現狀ノ遷延ハ啻ニ望マシカラサルノミナラス寧ロ危險ニ屬ス而モ其ノ間世上ハ始終各種ノ風説ニテ喧然タルコト故出來得ル限リ回答發送ヲ急ニセララルコト緊要ナリト述ヘ且上述ノ時日ヨリ以前ニ回答送付ノ運ニ至ル様特別ノ取計アリタシト請求シタルニ伯ハ現下ノ狀勢ヲ知悉スト雖モ謁見ノ日取ハ既ニ右ノ如ク定メラレタルコト故今更變スルコト能ハスト答ヘ尙ホ來ル火曜日ニハ回答ノ發送ヲ見ル様精精盡力スヘシト繰返シ陳述セラレタリ

○第四十六 (電信) 明治三十七年一月三十日發

栗野全權公使

小村外務大臣

貴官ハ可成速ニ「ラムスドルフ」伯ニ會見ヲ求メ本國政府ノ訓令トシテ左ノ通り陳述セラルヘシ
現下ノ時局ヲ此上遷延セシムルハ日露兩國ノ爲メニ重大ナル不利益タルヘシト確信スルヲ以テ
帝國政府ハ露國外務大臣閣下ノ指定セラレタル日取即チ次週火曜日以前ニ露國政府ノ回答ヲ受
領シ得ムコトヲ希望スト雖モ此事タル到底不可能ナルカ如ク見ユルヲ以テ帝國政府ハ果シテ
「ラムスドルフ」伯カ指定セラレタル時日即チ次週火曜日ヲ以テ回答ニ接スルヲ得ヘキヤ若シ否
ラストセハ露國政府ハ果シテ何日ヲ以テ右回答ヲ與フヘキカ其ノ確タル日取ヲ承知セムコトヲ
希望ス

若シ「ラムスドルフ」伯ニ於テ回答ノ期日ヲ明示セラレタルトキハ貴官ハ當日同伯ニ會見ノ上右回
答ハ如何ナル性質ノモノナルカヲ示サレムコトヲ求メラルヘシ

○第四十七 (電信) 露京發明治三十七年二月一日 東京着同 同日

小村外務大臣

栗野全權公使

一月三十日發貴電ニ關シ本官ハ一月三十一日夕「ラムスドルフ」伯ニ會見シタルニ伯曰ク自分ハ現
下ノ時局ノ重大ナルヲ十分ニ領得シ又可成速ニ回答ヲ發スルコトヲ確カニ希望シ居レリ然レトモ
問題ハ頗ル重大ナル案件ニ屬シ輕々之ニ處スヘキニ非ス加之關係各大臣并ニ「アレキシエフ」總督
ノ意見ヲ調和セシムル必要モアリシヲ以テ自然ニ遷延ヲ來シタル次第ナリトス回答發送ノ日取ハ
正確ニ貴官ニ告クルコト能ハス何トナレハ此事タル全然皇帝陛下ノ聖斷ニ依ルコトナレハナリ尤
モ自分ハ本件ヲ進捗セシムル爲メ盡力ヲ怠ラサルヘキナリト

○第四十八 (電信) 明治三十七年二月五日午後二時發

栗野全權公使

小村外務大臣

現下ノ時局ヲ此上遷延セシムルコトハ忍容スヘキニアラサルヲ以テ帝國政府ハ懸案ノ談判ヲ斷絶
シ露國ノ爲メニ侵迫セラレタル我地位ヲ防衛シ并ニ我權利及利益ヲ保護セムカ爲メ必要ト認ムヘ
キ獨立行動ヲ採ルニ決シタリ依テ貴官ハ本電接手次第左ノ公文ヲ露國外務大臣「ラムスドルフ」伯
ニ送附セラルヘシ

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ナル下名ハ本國政府ノ訓令ニ遵ヒ露國皇帝陛下ノ外務大臣閣下
ニ對シ左ノ通牒ヲ爲スノ光榮ヲ有ス

日本國皇帝陛下ノ政府ハ韓國ノ獨立及領土保全ヲ以テ自國ノ康寧ト安全トノ爲メニ緊要缺クヘカラサルモノナリト思惟ス故ニ如何ナル行爲タルヲ問ハス苟モ韓國ノ地位ヲ不安ナラシムルモノハ帝國政府ニ於テ之ヲ看過スル能ハス

露國政府カ韓國ニ關スル日本ノ提案即チ帝國政府ニ於テハ之カ採用ヲ以テ韓國ノ存立ヲ確實ニシ并ニ該半島ニ於ケル帝國ノ優越ナル利益ヲ擁護スル爲メ緊要不可缺ト思惟スル提案ニ對シ到底妥協ノ望ナキ修正ヲ提出シテ執拗ニ之ヲ拒絕シタルコト并ニ又露國カ其ノ清國トノ條約及滿洲地方ニ利益ヲ有スル他ノ諸國ニ對シ累次與ヘタル保障ノ存在スルニ拘ハラズ依然該地方ノ占領ヲ繼續シ爲メニ甚シク侵迫ヲ蒙レル滿洲領土保全ノ尊重ヲ約スルコトヲ執拗ニ拒否シタルコトハ帝國政府ヲシテ自衛ノ爲メ其ノ採ルヘキ手段ヲ慎重ニ考量スルノ已ムヲ得サルニ至ラシメタリ

露國ニ於テ了解シ得ヘキ理由ナクシテ屢次回答ヲ遷延シ加フルニ平和ノ目的トハ調和シ難キ軍事的活動ヲ爲セルニ拘ハラズ帝國政府カ現交渉中用ヒタル耐忍ノ程度ハ其ノ露國政府トノ關係ヨリ將來誤解ノ一切ノ原因ヲ除去セムコトヲ忠實ニ希望シタルコトヲ十分證シ得テ餘リアリト信ス而モ帝國政府ハ其ノ盡力ノ結果帝國ノ穩當且無私ナル提案若ハ又絶東ニ於テ鞏固且恆久ノ平和ヲ確立スルニ近キ如何ナル他ノ提案ニ對シテモ露國政府ノ同意ヲ得ルコトハ毫モ其ノ望

ミナキヲ領得シタルカ故ニ現下ノ徒勞ニ屬スル談判ハ之ヲ斷絶スルノ外他ニ選フヘキ途ヲ有セス

帝國政府ハ右ノ一途ヲ採用スルト同時ニ自ラ其ノ侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏固ニシ且之ヲ防衛スル爲メ并ニ帝國ノ既得權及正當利益ヲ擁護スル爲メ最良ト思惟スル獨立ノ行動ヲ採ルコトノ權利ヲ保留ス

下名ハ云々

●第四十九

(電信)

明治三十七年二月五日午後二時發

栗野全權公使

小村外務大臣

貴官ハ別電ノ公文ト同時ニ左ノ趣旨ノ公文ヲ「ラムスドルフ」伯ニ送付セララルヘシ

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ナル下名ハ本國政府ノ訓令ヲ遵奉シ全露西亞皇帝陛下ノ外務大臣閣下ニ對シ茲ニ左ノ通告ヲナスノ光榮ヲ有ス

日本帝國政府ハ露西亞帝國政府トノ關係上將來ノ紛糾ヲ來スヘキ各種ノ原因ヲ除去セムカ爲メ有ラユル和協ノ手段ヲ盡シタルモ其ノ效ナク帝國政府カ極東ニ於ケル鞏固且恆久ノ平和ノ爲メニナシタル正當ノ提言并ニ穩當且無私ナル提案モ之ニ對シテ當サニ受クヘキノ考量ヲ受ケス從

テ露國政府トノ外交關係ハ今ヤ其ノ價值ヲ有セサルニ至リタルヲ以テ日本帝國政府ハ其ノ外交關係ヲ斷ツコトニ決定シタリ

下名ハ更ニ本國政府ノ命ニヨリ來ル。日ヲ以テ帝國公使館員ヲ率ヒテ露京ヲ引揚ル意思ナルコトヲ茲ニ併セテ「ラムスドルフ」伯閣下ニ通告スルノ光榮ヲ有ス
下名ハ云々

○第五十

(電信)

露京發明治三十七年二月五日午前五時五十分
東京着同 同日午後五時十五分

小村外務大臣

栗野全權公使

「ラムスドルフ」伯ノ請ニ依リ、本官ハ二月四日午後八時ヲ以テ伯ト會見シタルニ、伯曰ク露國回答ノ要旨ハ只今「アレキシエフ」總督ニ發電シ置キタリ、右ハ同總督ヨリ我公使「ローゼン」男ニ轉送セシムル筈ナリ、同總督ニ於テ地方ノ情況ヲ斟酌シテ多少ノ修正ヲ加フルコト、或ハ之レ無キヲ保シ難シト雖モ、多分ハ斯ル變更ヲ加ヘラレルコト無カルヘシト、
是ニ於テ伯ハ其ノ私見トシテ述テ曰ク、

露國ハ韓國ノ獨立及領土保全ノ原則ノ維持ヲ希望スルト、同時ニ朝鮮海峽ノ自由通航ヲ必要トス、露國ハ欣ムテ出來得ル限りノ讓歩ヲ爲スヘシト雖モ、露國ニ對スル戰略ノ目的ノ爲メ韓國ノ利用

セラレルヲ欲セス、且又日露間ニ良好ノ關係ヲ確立スルカ爲メニハ、兩國ノ合意ヲ以テ極東ニ於ケル兩國ノ直接勢力及行動ノ範圍ノ間ニ緩衝地帶ヲ設定スルノ有利ナルヲ信スト、

上記ハ伯カ全然其ノ私見トシテ述ヘラレタル所ナリ、斷言ハ爲シ得サルモ露國回答ノ要旨モ亦多分斯ノ如クナルヘシト思考ス

○第五十一

(電信)

露京發明治三十七年二月六日午後五時五十七分
東京着同 同日午前五時四十五分

小村外務大臣

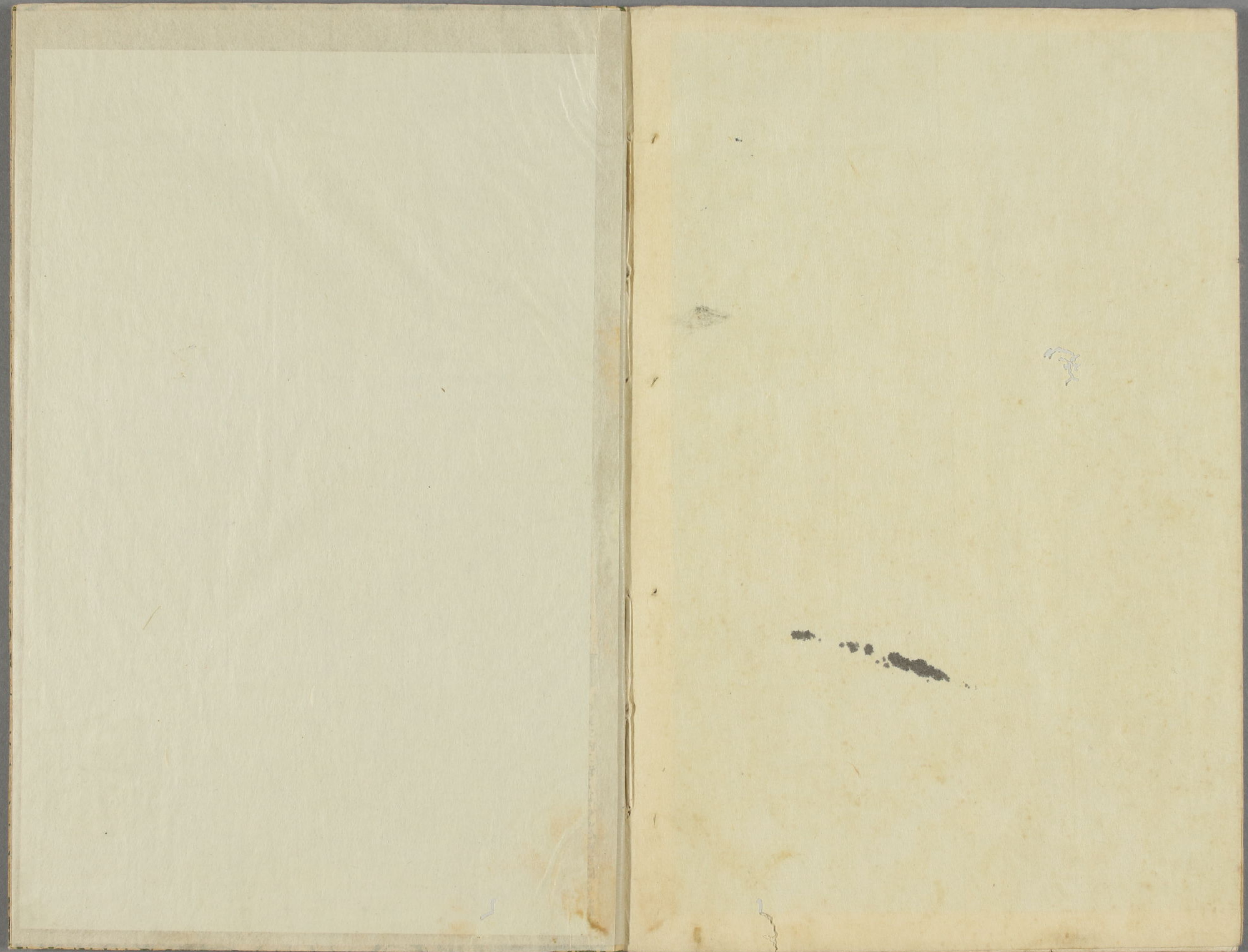
栗野全權公使

二月五日發二通ノ貴電ニテ御訓示ノ公文ハ、今六日午後四時ヲ以テ「ラムスドルフ」伯ニ提出シタリ、本官ハ館員及留學生ヲ率ヒ來ル十日當地ヲ引揚クヘシ

明治廿九年九月十三日伊香保
嘯雲樓入浴中作表牒

六十九翁采香記





三十一日 對外硬同志大會

豫定の通り昨日午後一時三十分より神田錦
輝館に於て開會す出席者神輿知常、大竹
貫一、山根正次、高野孟矩、和泉彦邦、大野
三郎、大久保不二、渡邊鼎、宮右三郎、木内
信、工藤行幹、平岡浩太郎、櫻井節、共四朝、
愛澤壽聖、右田古文、其他同會委員頭山、中
西國友、岡部、恒屋、中井等の諸氏を始め無
慮二千餘名にて發起人總代神輿氏先づ開會
を報じ中西正樹氏開會の趣旨を演説し次に
神輿氏所感を述べ且つ滿洲の同意を得て鈴
木重遠氏を座長に推薦し鈴木氏の着席を待
ちて神輿氏の本會を「對外硬同志會」と稱す
建議を提出し異議なく可決夫れより宣言
決議原案を可決次に中井喜太郎氏の如
き特別決議案を提出し直ちに可決
△特加決議
韓國龍巖浦に於ける露國の行動の日露協
商を蹂躪するものと認む
次に大竹氏の動議にて實行委員十名を擧げ
夫より神谷氏の近衛公衛の増田氏の大隈伯
の各意見書を代讀し渡邊鼎氏の板垣伯の意
見を代讀し次に工藤行幹、山根正次、大竹貫
一氏等の演説あり右にて式を終り佐々友房
氏の發聲にて、天皇陛下萬歳を三稱し散會
を告げたるハ正三時なりし

前項に記載せる對外硬派の宣言書及決議案の左の如し

東亞の平和を保持するハ我大日本帝國の
天職にして又國是ならずや是を以て内に
の憲政を施行し外に僑民を保護し或ハ列
國を懲懲して獨力朝鮮を併呑し或ハ列
國と聯合して華北の領土を鎮定し或ハ列
國と同盟條約を締結する等皆斯の天職を盡
し國是を擴張する所以にあらざるなきな
り然るに近來露國の爲す所を見るに益々
顧ふに我國の露國に於ける好む修し道々
守る至れり盡せりと謂ふべし對馬の古領
樺太の交割ハ今暫く言はず遼東半島の古領
國が百戰の餘收を以て東洋平和の屏障と
なせし之を露國の忠言を敬重せるの故
を以て之を清國に還附せり是れ我國の露
國に忍びし一なり然るに其後三年ならず
露國の露國に忍びし二なり加ふるに露國の
借し軍港を築き商港を開けり是れ我國の
露國に忍びし三なり加ふるに露國の露國に
亞細亞に満足せず地を滿洲に擴つて軍事
的の東滿鐵道を敷設し之を旅大に聯絡せ
り是れ我國の露國に忍びし三なり又露國
の我國の扶翼して其國運を進捗せしめん
とする所なるも露國精銳極りなきに依り
勉て退讓して所謂日露協約を締結せしめ
我國の露國に忍びし四なり殊に拳匪の變
亂に當てや露國の恣に大兵を滿洲に入れ
て盡く其地を占領し市府を營み要塞を築
き猶進て清國と密約して滿洲を擧取する
の地步を爲らんことを謀れり是に於て我
政府の英米兩國を懇力し僅に滿洲還附條
約を締結せしめ以て其撤兵を待てり是れ
我國の露國に忍びし五なり此の如く我國
の實に五度露國に忍べり而て其滿洲還附
條約の締結せらるるや天下皆以爲く露國

復た約に背くならんハ何ぞ闖らん撤兵
期日を経過するも敢て條約を履行せず
さへ又密約を清國に迫り清國若し其密約
を諾するなくんバ撤兵を首せざるべしと
稱し却て陸軍軍艦を増遣し鐵道堡壘を修
築し其爲す所盡く戰備に汲々たらざるな
く一方に清國を脅迫して密約に調印せ
しめんとし他方にハ我國を囑喝して反對
を中止せしめんとする嗚呼是れ果して忍ぶ
べきか是をも忍ぶべくんバ孰れか忍ぶべ
からざらん

要するに露國國南の志ハ一日にあらざる
東侵の謀も亦多方ならざるにあらざる然れ
ども特に拳匪の變亂以來其の東亞の平和
を攪亂して滿洲を掩奪せんとするの行動
に至てハ直に我國の天職を凌辱し我國の
國是に反觸する者と謂はざる可らず國家
若し天職を行ふ能はずんバ國威何を以て
宣揚せんや國家若し國是を遂ぐる能はず
んバ國力何を以て發展せんや維新更始の
雄圖ハ未だ完成と稱す可らず明治中興の
偉業ハ中途に挫折すべからざるなり故に
我政府ハ速に挫折すべし現當局者ハ日英同
盟當時の當局者なり其の滿洲問題に於て
必ずや遺算なげん唯夫れ遲延日を涉り徒
の甚だ取らざる所ハ新嘗膽既に久く軍備
擴張亦既に成れり吾人ハ茲に所信を聲明
にして事に託し難を避け糊塗時局の結了
のみを圖るあらんか則ち國是を誤り天職
を曠ふするの罪を免るべからず
決議案
露國をして撤兵條約を履行せしめ清國を
して滿洲開放を執行せしめ以て東亞永遠
の平和を確保するハ帝國の天職なり吾人
ハ我政府が敢て懈怠せず速に之を遂行せ
んことを切望す

